

「エッセンスシート」を用いた国語の学習観・学力にかかわる考察

東京電機大学中学校・高等学校 松永 航平

実践背景

【問題点】

- ①国語の、「なんとなくできたりできなかつたりする」「できないからやらない」というイメージ
- ②授業・考査と模試(あるいは入試)成績の乖離

【期待】

- ①「学力」の高い生徒の考え方・取り組み方にフォーカスし、模倣することで自己調整を行うようになること
- ②国語の授業・自主学習に対する考え方を変化させること
- ③上記①②のもと、初見文章に対する学力を向上させること

取得データおよび検証方法

- ①アンケート(1学期(5月)・2学期(12月))
- ②模試成績と「エッセンスシート」の取り組み
- ③ロイロノートに提出されたエッセンスシート／振り返りシート
- ④考査成績

実践方法

- 対象学年: 高校1年生
- クラス数および対象生徒人数: 2クラス(42名/38名)
- クラス特性: 習熟度上位クラス/基礎クラス
- 実践期間: 2024年5月～

以下、「ロイロノート」を活用。

○「エッセンスシート・授業」

- i) 考査ごとに、授業の内容を1枚のカードにまとめた「エッセンスシート」を作成。※情報を「たたむ」ことを意識する。
- ※「この單元におけるもの」「今後も継続的に必要なもの」を分ける。
- ※「完全に自分のものになったもの」は消してもよい。
- ii) 常に相互にシートを見られるようにしておく。
- iii) 授業中、「エッセンスシートに溜める」ことを促し、その時間を確保する。
- iv) 単元・教材ごとに、「クラスメイトのエッセンスシートを見る」ことを促し、その時間を確保する。(時間に余裕がない時は割愛)
- v) 考査前の最後の1時間は、上記iii) iv) の総まとめの時間とする。
- vi) 考査後にそのシート自体の振り返りを行う。

結果

① アンケート ※6「とてもあてはまる」～1「まったくあてはまらない」の6段階、各項目の満点6.0

クラス	介入	ポジティブな事項				ネガティブな事項					
		意味理解	思考過程	方略	失敗活用	暗記	結果	環境	授業だけ		
習熟度上位	介入あり	1学期	4.4	4.6	5.1	4.8	3.2	3.5	4.0	4.4	
		2学期	5.0	4.9	5.3	5.0	2.9	2.9	3.9	3.9	
		2学期-1学期	0.6	0.2	0.2	0.2	-0.4	-0.6	-0.1	-0.5	
習熟度一般	介入あり	1学期	4.6	4.5	5.0	4.3	3.1	3.5	4.3	4.2	
		2学期	4.9	4.3	5.1	4.5	3.4	3.6	4.0	4.3	
			2学期-1学期	0.2	-0.2	0.1	0.2	0.2	0.1	-0.3	0.1
	介入なし	1学期	3.6	4.1	5.0	4.2	3.3	3.9	4.1	4.5	
		2学期	4.3	4.0	4.9	4.5	3.5	3.8	4.1	4.6	
				2学期-1学期	0.7	-0.1	0.0	0.3	0.3	0.1	-0.1
1学期		3.8	3.8	5.1	4.4	3.5	4.0	3.9	4.6		
		2学期	4.6	4.6	5.3	5.0	3.5	3.6	4.4	4.6	
		2学期-1学期	0.9	0.8	0.1	0.6	0.0	-0.4	0.5	0.0	

青字: 望ましい結果 (ポジティブな事項で+/ネガティブな事項で-)
赤字: 望ましくない結果 (ポジティブな事項で-/ネガティブな事項で+)
※数値は四捨五入したものであり、小数点以下の見かけの数字にずれが生じています。

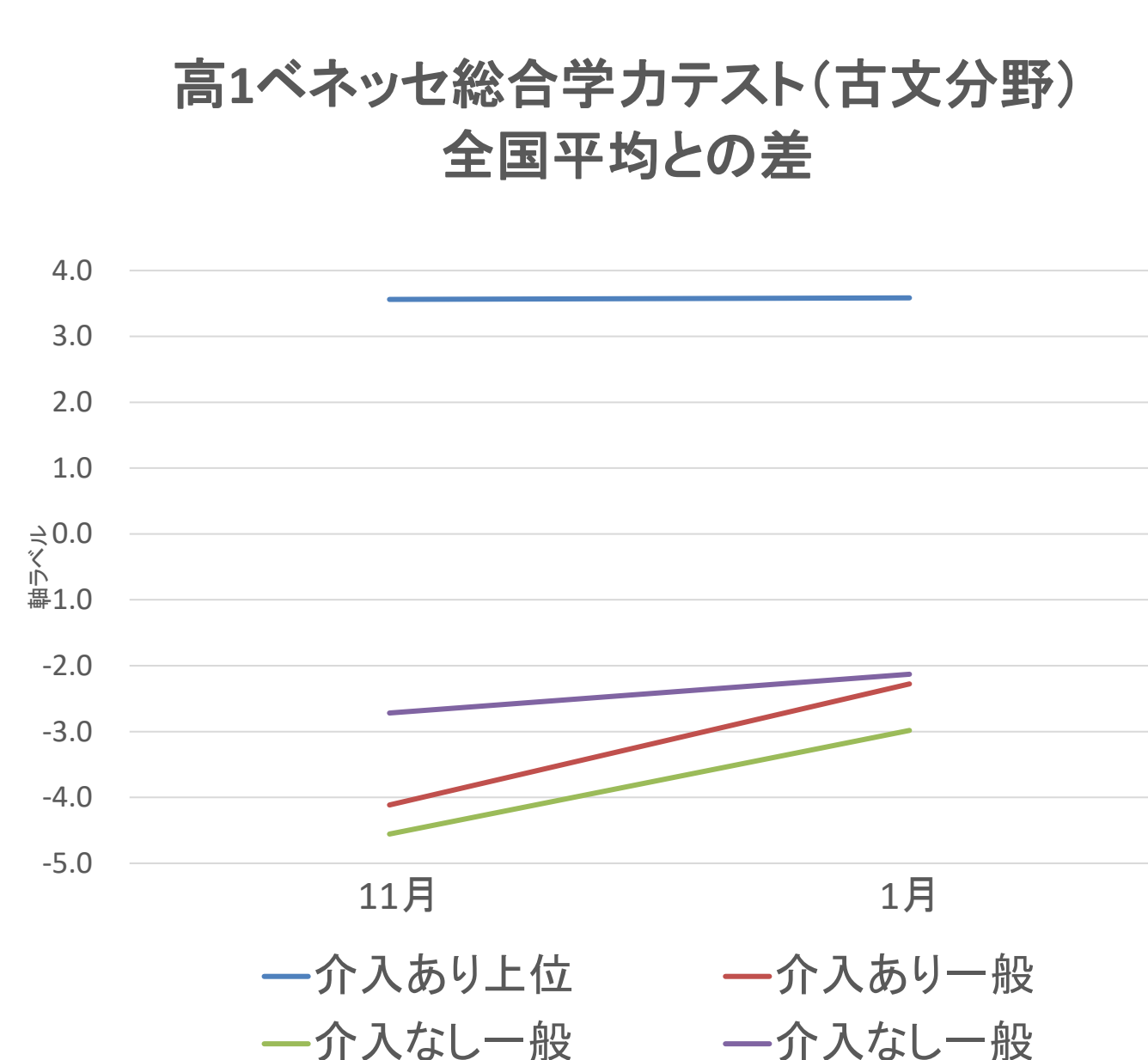
すべてのクラスにおいて、概ね良い変化がみられる結果となった。

特に習熟度上位者で編成されるクラスは、本研究のねらいでもある授業観に対する変化がはっきりと見られた。

その一方で、習熟度一般クラスにおいては、介入あり/なしでの差があまり見られなかった。

授業ではたらしかけを、すでに学習の準備ができていいる層とそうでない層に分けて考え、介入の強度を変えていく必要がある。

② 模試成績



11月～1月に向けて全国的に平均点が下がる=内容が難化する中で、

介入クラスの全国平均との差の上昇分が下がり、(僅かではあるが)上昇したことはポジティブにとらえたい。

また、
習熟度上位クラスにおいて、1月模試成績下位5名はすべてエッセンスシートの質が低い、または未提出であり、

習熟度一般クラスにおいて、1月模試成績上位3名はすべてエッセンスシートの質が向上していた。

③-(1)「エッセンスシート」例

③-(2)「エッセンスシート振り返り」例

④ 考査成績推移

考査問題自体が若干異なるので、直接比較は難しいが、習熟度一般クラスにおいて、介入の有無である程度の差が見取れる。

「授業の内容をリカバリーすること」に対して、「エッセンスシート」作成と(相互)復習が一定の成果を得られたといえる。

高1「言語文化」クラス別平均点推移

クラス	介入	1中間	1期末	2中間	2期末
習熟度上位※	あり	67.2	70.0	67.7	65.2
	なし	47.3	60.3	55.1	50.7
習熟度一般	あり	46.6	60.1	45.6	43.5
	なし	47.4	66.8	50.2	47.2

※習熟度上位クラスは考査問題も一部異なる

考察・課題

○ 考察

- ①学習観・メタ認知(「結果」①)
上位クラスでは、期待通りに本取り組みの成果が反映された一方で、一般クラスでは、予想と異なる結果となった部分もあった。上述したように、クラスごとに授業での働きかけの内容や強度に工夫が必要であると考えられる。
- ②エッセンスシートと模試/考査成績(「結果」②・③・④)
成績上位者または向上者は、概ねエッセンスシートを適切に作成・復習できている。
特に、「結果」④考査成績推移からは、「エッセンスシート」を用いることでの学習成果は見える。

○ 反省・課題

- ①「実践背景」【期待】①について、データとしてはっきりと見られるようなフレームを作るべきであった。(「結果」③-(2)が該当)
- ②上記の考察②をうけると、初見文章へ対応力(≒所謂「学力」)の伸長を求めるならば、エッセンスシートのシステムに加えて、以下のような授業のデザインや介入の工夫が、解決すべき課題の中心になるだろう。

- A)【授業】初見文章読解に向けての授業デザインの調整
- B)【介入】学習実態の確認/促進
- C)【介入】「エッセンスシート振り返り」を用いた相互復習の取り組みの促進

予習・復習と授業の一体感を高める授業デザインの試み

東京電機大学中学校・高等学校 星野 智

実践背景

前年度までの実践により、振り返りを用いた授業と復習を結びつける指導モデルを考案した。「実践方法」実践紹介(B)参照
そのモデルを用いた指導に再現性があるか、前年度とは異なる生徒を対象として実践を試みた。
加えて、予習と授業のつながりを強化するための試みも行い、予習、授業、復習のサイクル構築への手がかりを得ることを目指した。

実践方法

- 対象学年: 中学3年生
- クラス数および対象生徒人数: 1クラス(計33名)
- クラスの特性(コースや習熟度編制等):
中高一貫生 習熟度上位クラス 3単位授業
- 実践期間: 1学期および2学期(4月から12月)

実践紹介

(A) 予習活用を織り込んだ授業デザイン

- (1) 予習(全体像の把握と課題の認識)
教科書の指定範囲の一読 → わかる, わからないの区別
- (2) 授業開始時(課題の明確化)
習得目標に準拠した「予習確認問題」に取り組む
- (3) 講義 → 予習確認問題(理解確認と成長実感)
本時の習得目標の確認 → 解説講義
→ 予習確認問題に再挑戦

(B) 復習につながる振り返り(前年度 考案モデル)

- (1) 振り返りの記入(終盤の5分)
【記入内容】
① わかったこと ② つまずき
③ 自己設定課題(小テストに向けて)
- (2) 小テスト後に、定期考査に向けた課題設定
※ テストまでの取り組みと結果を踏まえて

①	②	
(1)		
③ すぐに(つまずき対応など) <input type="checkbox"/>	③ 小テストまでに(定着の点検) <input type="checkbox"/>	③ 小テスト後に追加 <input type="checkbox"/>
		(2)

振り返りの記入欄と実践(1),(2)の対応

振り返り・課題設定の質を高める工夫

(a) 望ましい例の共有

- ① よい記述を、理由とともに電子黒板で提示【指導初期】
- ② 振り返り記入後に小グループにて記載内容を発表
→ よい表現、課題設定を取り入れるよう促す【1学期】
- ③ 振り返り冊子の見開きの写真を自由に閲覧
※ ロイロノートを活用【小テスト直後】

(b) 振り返り記述の手引き

- ① 活動の意図 ② 期待する記述内容とその理由
- ③ つまずきの状況別に分類した課題設定例
をいつでも参照できるように、振り返り冊子の最初に掲載

つまずきの種類	課題例
新しい用語、定義などの意味する内容を、自分の言葉や具体例などで説明できない	図、式、具体例、教科書に書かれてない言葉を用いて用語、定義の解説をまとめる
定理、公式の証明を説明できない	証明を書き、理解するために必要な言葉やイメージを補いまとめる
例題の解法で「なぜそのようにするか」を説明できない部分がある	例題を解き、補足説明を書いた吹き出しを書き加える。さらに類題を解き理解を確認する
解法は理解できているが、その過程で使われる既習事項を忘れてる	つまずきの原因である既習事項を復習した上で、再度同じ問題を解く

③ つまずきと課題例の対応

取得データおよび検証方法

アンケート

- ① 6件法: 動機づけ, 学習方略, メタ認知, 学習観・信念, 効力感(4月, 12月 計2回)
 - ② 自由記述: 振り返り活用状況, 意識の変化(12月)
- ・定期考査の得点
・生徒の記述した振り返り(画像データ)

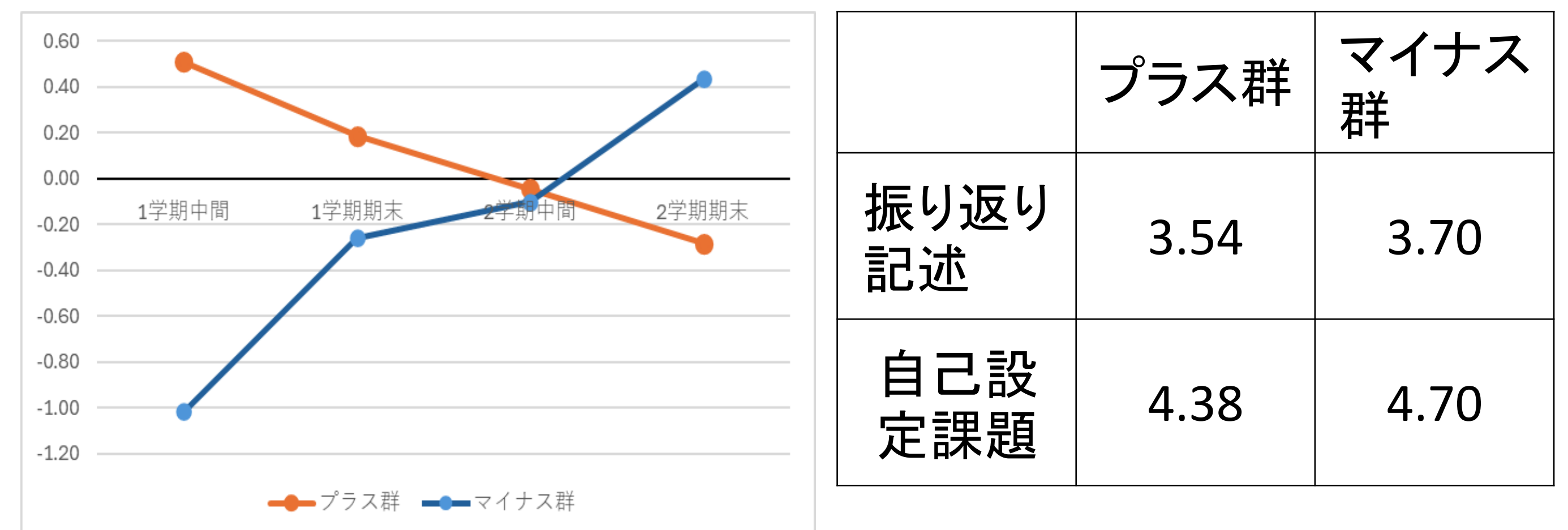
結果

(1) アンケート結果(t検定による有意差が認められた項目)

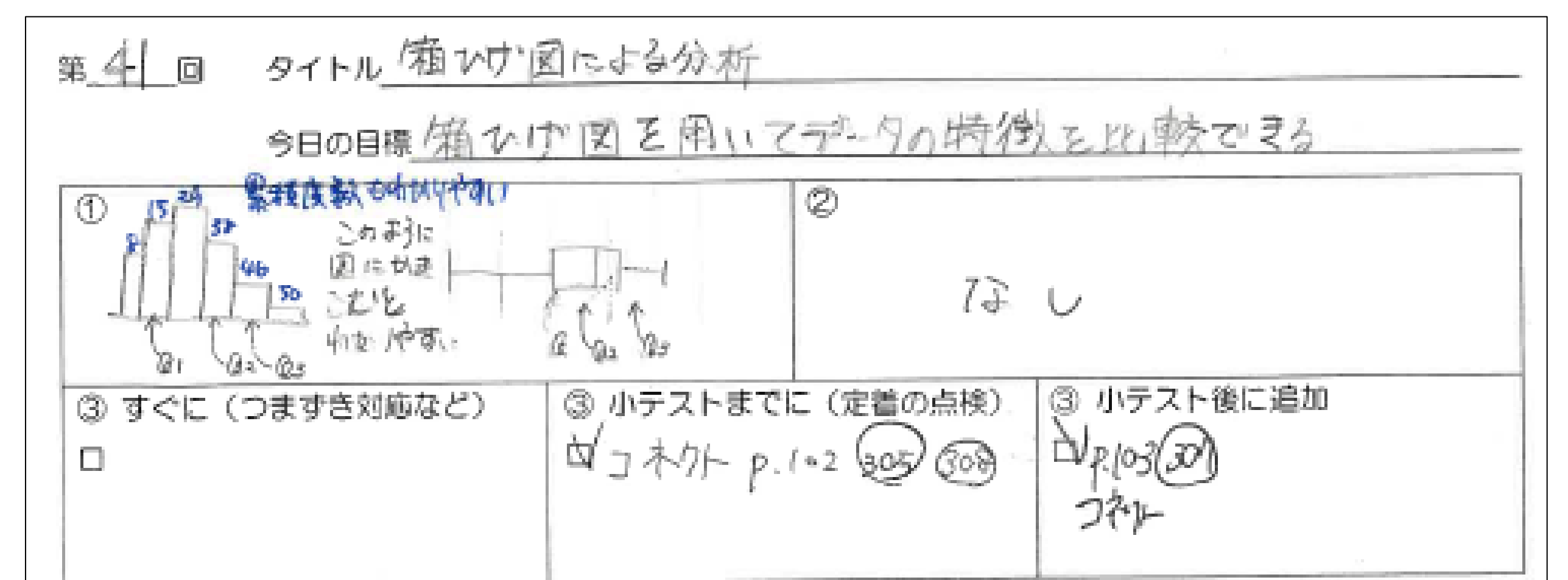
項目	4月		12月	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
予習実行	2.20	1.13	4.24	0.99
授業後の振り返り実行	3.04	1.48	4.00	1.12
復習実行	3.24	1.39	3.94	1.24
学習法の振り返り	3.24	1.53	3.68	1.32

注: $p < .05$

(2) 1学期中間考査得点を基にした2群の標準化得点の平均点推移およびアンケート(振り返りの活用状況)の平均値



(3) 振り返りの記述例(平均と比較して成績が向上した生徒)



(4) アンケート自由記述(一例) ※原文ママ

「わかったこと」, 「つまずき」の記述の活用法

・復習やテスト対策で問題を解く前に読んでおくと、その日にやったことも一緒に思い出せてスムーズに勉強を進めることができた。

「自己設定課題」の活用について

・数Aの勉強を始めるときに、最初に自己設定課題を解けば、どんなところが分からなかったのか、覚えられてないのか思い出すことができる。
・心配な部分を中心に自己設定課題を決めるため、そこを繰り返し解いている。

成果と課題

成果

- ① t検定の結果、予習・復習・振り返りの実行において、統計的に有意な行動変化が見られた
- ② 成績下位層の考査得点に伸びが見られた
- ③ 復習において、ねらい通りに振り返りを活用している生徒が一定数確認された

課題

- ① 成績上位層に効果のある振り返り活用の指導方法の検討(下位層への支援との兼ね合いも含めて)
- ② 交絡因子、予習効果の測定方法についての検証
- ③ t検定の結果、有意な変化が見られなかった数学学習に対する効力感や意欲について、有意な変化を促す介入策の検討

予習の実施で授業内の理解力を高め、主体的学習サイクルを構築する

東京電機大学中学校・高等学校 田畑 佳介

実践背景

【課題意識】

- 国数英と比べ家庭学習の習慣をもつ生徒がきわめて少なく、定期考査前に教材を見直して暗記する姿が多く見られる。
- 歴史の授業において教員が劇場型で講義を展開し、生徒は聞き役に回ってしまっている。

【生徒へのアプローチ 実践から期待する姿】

- 予習→授業→復習のサイクルを回す主体的学習者
- 授業で獲得する情報量の充実化

実践方法

【実施対象】

- 中学社会(歴史分野)
- 中学3年生
習熟度上位クラス 1クラス
基礎クラス 4クラス(内、実践の介入は3クラス)
- 週2単位 1単位50分
- 2024年4月～12月

【実践の内容】

■授業前の予習活動

- ・問いづくり
→指定した教科書ページを事前に読む
→疑問に思った点を「あなたの問い」として用意
例)なぜ日本は世界恐慌の影響を受けたのか
なぜ軍部のクーデターが起きたのか

■授業内活動

- ・メモを取る習慣づけ
→板書事項+細くメモを書くように指示
→図や表を活用し、関係性を視覚化
- ・ノートの整理を意識させる
→体制化を促す
→色分け・矢印などで理解を深める工夫

■振り返りと理解の深化

- ・授業のまとめ活動
→「わかったこと・わからなかったこと」を一文で整理
→自分の言葉で振り返ることで理解を深める
- ・歴史タイムライン(年表)の活用
→因果関係・相関関係を整理しながら理解を深める
→理解の可視化につなげる
- ・次回の問いの提示
→次回の授業内容を授業者が事前に提示
例)なぜ日中戦争から日米戦争に突入するのか
戦争が起きると国民の生活にどのような変化が起こるか

①	月	日	曜日	の授業に向けた取り組み
■	あなたの問いは?			
	なぜ そもそも			?
■	授業で理解できたこと、理解が広がったことは? 疑問やモヤモヤが残ったことは?			
■	次回の授業の問い(担当者から)	教科書p	~	

■	あなたの問いは?			
	なぜ そもそも	日独伊三国同盟にイタリヤが加わったの理由が?		?
■	授業で理解できたこと、理解が広がったことは? 疑問やモヤモヤが残ったことは?			
		イタリヤもムッソリーニに主導権を握られていたため、ドイツや日本と同様に孤立していたとわかった。		
■	次回の授業の問い(担当者から)	教科書p	244~249	
		どのように終戦がはじかれたのか		

取得データおよび検証方法

【アンケート実施】

年度初めと定期考査後に実施。今年度は5回実施。

- 予習の頻度や内容(授業前の準備について)
- 復習の習慣(授業後の振り返り内容について)
- 授業中の活動(ノートのメモの量や質について)

【検証方法】

生徒の学習習慣の実施割合を算出、定期考査との相関性を分析

- 学習習慣と定期考査得点の相関係数を算出
- 学習習慣が成績向上にどの程度影響を与えたか検証

結果

生徒の活動について、以下①~③で変化が見られた

質問項目	4月始め	12月
①自分なりの問いを持って授業に臨んでいる	2.6	3.6
②人物や出来事を図や表に整理して理解するようにしている	2.6	3.4
③共通点や相違点に注目して理解するようにしている	3.1	3.7

①~③の内、+変化が見られた生徒の定期考査との関係性

	変化が見られた質問項目とその変化	1学期中間 偏差値50との差	2学期期末 偏差値50との差
生徒A	② 2 → 4 ③ 3 → 5	-15	+4
生徒B	① 3 → 6 ② 3 → 5	-21	+1
生徒C	② 2 → 4 ③ 3 → 5	-10	+1
生徒D	① 4 → 2 ③ 3 → 1	-3	-15
生徒E	③ 5 → 3	+3	-9

■回答ポイント

- ・授業を受ける意識の変化や情報の整理の仕方を工夫している生徒には、肯定的な得点の変化が見られた。
- ・2学期に入り、授業者側が事象の関係性を図式化して板書する機会を多く持つことを心がけた。そのためか、②の回答ポイントが上昇し、得点への変化も見られた。
- ・因果関係、相関関係をまとめる歴史タイムライン(年表)を自主的にまとめる生徒が数名見られた。

日本のこと	時代	世界のこと
西園寺公経の閣議	1911	
日露戦争	1904	
大正維新	1912	
管見 日露戦争の終結	1905	第一次世界大戦の勃発
シベリア出兵	1918	第一次世界大戦の終結

■一の変化

- ・①のような予習活動に否定的な生徒は、授業においても受け身の姿勢が見られるようになり、板書をただ写すだけの活動になってしまった。これが知識の定着や理解に結びつかなかったのではないか。
- ・2学期は第一次・第二次大戦期が範囲だったため、多国間の関係性が複雑になり、共通・相違を自分で整理できない生徒が増えたように見られた。

考察と今後の課題

【実践を通じた気づき】

- ・予習と授業のつながりが強いほど生徒の理解力は高くなる。
- ・予習をすることで授業の情報収集量に差がある。
- ・生徒は定期考査の得点の変化理由を自分なりに認知している。

【今後の課題】

- ・生徒の行動変化について、どのような動機付けが働いているかをもとに実践を変化させる。
- ・生徒間で問いを共有したり、他者の問いについて考えを出し合う活動を充実させる。

中学1年時における学習方略獲得の促進

東京電機大学中学校・高等学校 濱口 莉花

実践背景と課題

- 中学受験で培った基盤
→ 小学校や塾での受動的な勉強から自律的な学びへの成長
- 反復方略を中心とした授業形態
〈長期的反復〉 ラウンドシステム・・・教科書を1年間に3回繰り返す
〈短期的反復〉 授業内での復習・教科書準拠ワークブックの宿題
→ 授業を通じて方略を会得できるか
学習成績の向上に結び付けられるか
メタ認知の育成（振り返りの活動）
- 学習動機、自己効力感と学習方略との関連性
→ 生徒の性質や傾向を考慮した授業の展開

実践方法

- 対象学年: 中学1年生 A組、D組、E組（各クラス33名）
- クラスの特性: 4単位授業
- 実践期間: 2024年5月～11月
- 実践内容: 1. アンケートによる調査
2. 学習方略の意識づけ
3. 振り返りの活動

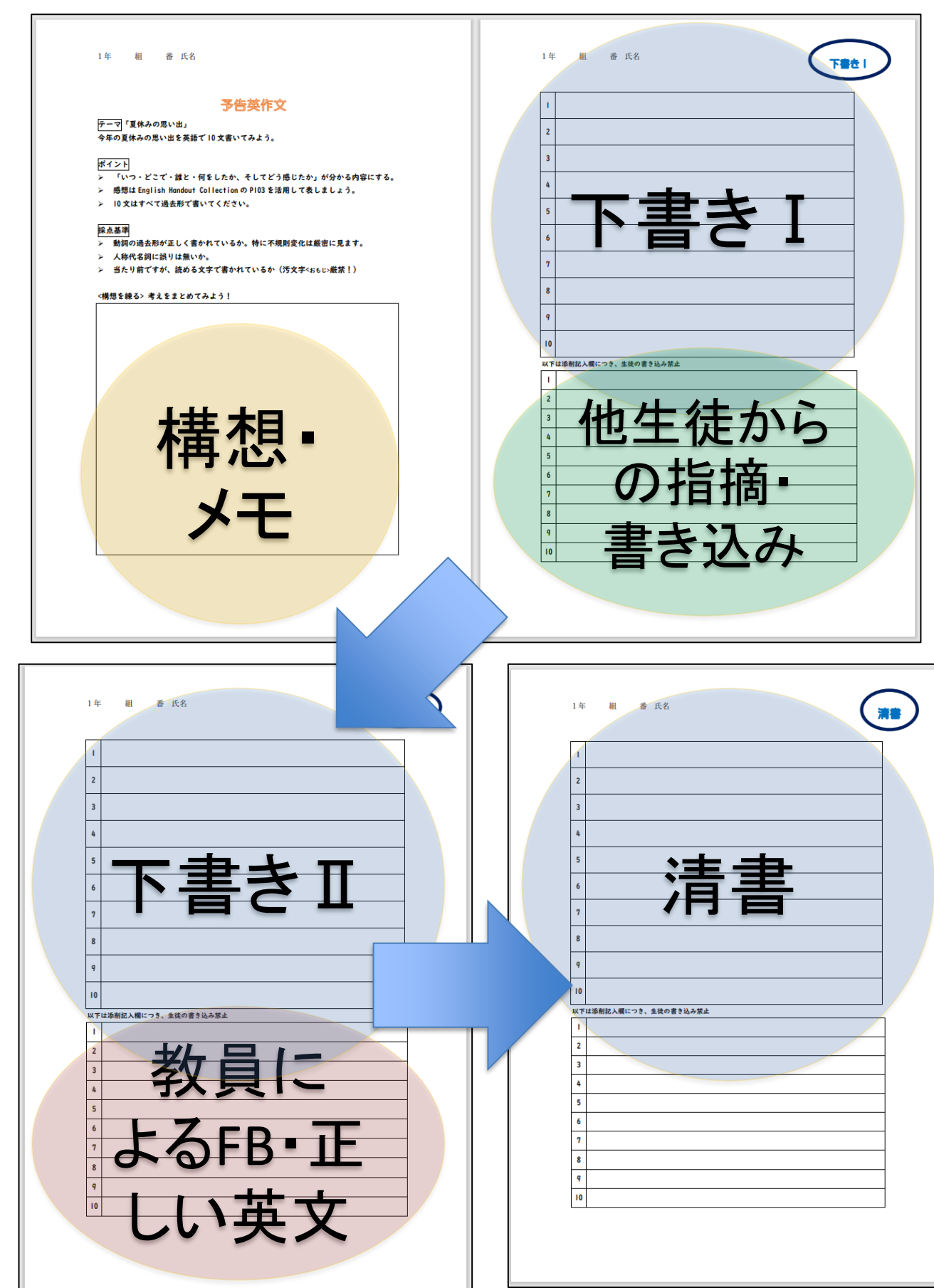
1. アンケートによる調査（※「取得データおよび検証方法」参照）
2. 学習方略の意識づけ（7月・10月 2回）
定期考査直前の授業で、スライドを配布し学習方略の意識づけを行った。

工夫して勉強しよう
Learning Strategy

ワークブックのくり返し

マークの例

3. 振り返りの活動（メタ認知方略）
「書く」活動
① 下書き I を書く
② 下書き I を班で回し読みし、お互いの間違いを書き込んで指摘する
③ メンバーからの指摘をふまえ、下書き II を書く
④ 下書き II を教員に提出する
⑤ 教員からのフィードバックを見ながら清書する
⑥ 清書を見ながら書いて練習する
⑦ ペーパーテスト（定期考査）



- 「話す」活動
① 読み上げ原稿を作る
② 授業内で会話文・プレゼンを練習する
③ 自宅でロイロノートの録音機能を使用し、音声を提出する
④ 自分の音声を聞きなおす
⑤ 音声で間違っていた箇所を意識しながら練習する
⑥ パフォーマンステスト（口頭試験）
（※③、④の過程を複数回、日を分けて設け「TAKE1」「TAKE2」...とした）

【ロイロノートの提出ページ】

取得データおよび検証方法

- アンケート
・実施回数: 3回（5月上旬、6月下旬、10月上旬）
・調査項目:
①「学習方略」「動機づけ調整方略（協同方略）」
②「学習動機」
③「自己効力感」
・解答方法:
①学習方略
6. とても役立つ
5. まあまあ役立つ
4. 少し役立つ
3. あまり役立たない
2. 役立たない
1. まったく役立たない
②学習動機・③自己効力感
6. とても当てはまる
5. 当てはまる
4. 少し当てはまる
3. あまり当てはまらない
2. 当てはまらない
1. まったく当てはまらない
・クラス平均値
・1～6それぞれの数値の割合・円グラフで可視化
- 学習成績（定期考査得点、模試偏差値）

結果

- アンケート結果
以下を算出し、第1回と第2回の結果を比較した。
・全体回答平均値
・クラス回答平均値
・個人回答数値

		6月 実践前	10月 実践後	差異
認知的方略	反復方略	4.49	4.66	0.17
	体制化方略	4.25	4.66	0.41
	精緻化方略	3.98	4.07	0.09
メタ認知方略	モニタリング	4.30	4.49	0.19
	プランニング	4.55	4.87	0.32
	コントロール	4.39	4.58	0.19
学習動機	協同方略	4.01	4.21	0.20
	内容関与動機	4.09	4.54	0.45
	内容分離動機	3.21	3.34	0.13
	自己効力感	2.93	3.10	0.17

■ 学習成績

	学力推移調査 平均点偏差値		定期考査 平均点		
	4月	9月	1学期中間	1学期期末	2学期中間
全体 (非介入クラスを含む)	47.1	45.7	51.9	52.7	49.1
A	47.6	45.8	50.3	53.7	52.9
D	48.0	48.0	53.5	58.6	56.1
E	44.3	43.0	44.1	47.0	38.3

考察と今後の課題

- 成果
回答数値の上昇・・・学習方略: 体制化方略、プランニング、モニタリング(A、D組)
学習動機: 内容関与動機
自己効力感
- 課題
・学習成績の変化がない
→ 学習方略を反映した教材・授業づくり
・クラス間での差異が大きい
→ それぞれのクラスに適切なアプローチ
・成績が比較的良くても自己効力感は低い
→ 日頃のポジティブなフィードバック
定期考査の平均点を高く設定する
・メタ認知方略の数値が伸びづらい
→ 授業内外でのサポート